

# 裁判の確定と一事不再理（憲法39条・二重の危険）

ゼロから司法試験 復習ノート / ゼロから刑事訴訟法#33 / 動画: <https://youtu.be/ipLoWpSUHDU>

第5章 裁判・救済 ① / 動画の内容を見返し用にまとめたものです（動画には含みません）。

## 判決の確定とは〔短答・論文共通〕

まず確定の意味。判決が言い渡されても。すぐ刑務所、ではありません。不服を言える期間がある。その通常の不服申立てで、もう争えなくなった状態。これを確定判決と呼びます。例外が再審です。確定後でも、冤罪なら特別にやり直せる。固定されて、動かなくなる。

## いつ確定するか——3つのパターン

### 〔短答知識〕

確定するタイミングは、3つ。一つ、上訴期間が過ぎたとき。控訴は14日です。二つ、上訴

の放棄・取下げ。まだ争っていない段階で権利を捨てる、が放棄。いったん争ったのをやめる、が取下げ。三つ、上告審の判決。最高裁の上はないので、即確定。

## 確定力——3つの力〔論文の骨格〕

確定すると、3つの力が生まれます。一つ、形式的確定力。もう上訴で争えない。その手続の中で、結論が固定される。二つ、実質的確定力。これが核心です。別の裁判で蒸し返すことも、できなくなる。別名、既判力。そして一事不再理効です。三つ、執行力。刑を強制的に実現できる力です。確定して初めて、刑務所収容や罰金徴収ができる。

## 一事不再理効と憲法39条〔論文の骨格〕

### 条文 日本国憲法39条（遡及処罰の禁止・一事不再理）

何人も、実行の時に適法であつた行為又は既に無罪とされた行為については、刑事上の責任を問はれない。又、**同一の犯罪について、重ねて刑事上の責任を問はれない。**

一事不再理効。確定で、同じ事件の再起訴・再審判が許されなくなる。有罪でも無罪でも、一度確定したら二度と。後段です。同一

の犯罪について、重ねて刑事上の責任を問われない。これが二重の危険の禁止。国家は強大です。負けても何度も裁き直せるなら。市

民は、いつまでも処罰の恐怖にさらされ続ける。

## 再起訴されたら——免訴（337条1号）〔短答・論文共通〕

条文 刑事訴訟法337条（免訴の言渡し）

左の場合には、判決で免訴の言渡しをしなければならない。一 **確定判決を経たとき**。二 犯罪後の法令により刑が廃止されたとき。三 大赦があつたとき。四 時効が完成したとき。

では、ルールを無視して再起訴したら、どうなるか。裁判所は、中身を見ずに打ち切る。免訴判決です。第23回の3つの出口、覚えていますか。その免訴です。確定判決があれば、337条1号で免訴。門前払いで、手続を終わらせませす。

### 効力が生じる裁判・生じない裁判 〔論文の骨格〕

ここで大事な振り分け。確定すれば全部 効力あり、ではない。効力が生じるのは、有罪判決と無罪判決。クロかシロか、結論を出した。二重の危険が当てはまる。一方、生じないのは、管轄違いと公訴棄却。あなたは無実だ、と言ったわけではない。中身の危険には、まださらされていない。軸は一つ。実体の危険をくぐったか、です。

### 免訴の法的性質——形式裁判なのに 効力あり 〔論文の骨格〕

少し高度ですが、免訴の性質が論点になります。時効完成で免訴、を考えます。これは実体

か形式か。通説は、免訴は形式裁判。理由は、無実の人でも時効が来れば免訴になる。犯罪があつたと認定すると、無実と矛盾する。ところが、一事不再理効は、例外的に生じる。被告人は一度、処罰の危険にさらされた。憲法39条の趣旨。しかも法律は、免訴を無罪と同じに扱う。費用負担も、再審の事由でも、無罪と区別しない。再起訴されたら、今度は337条1号で免訴です。

### 客観的範囲——公訴事実の同一性 〔論文の骨格〕

効力の範囲です。まず、どこまでの事実にあぶか。例えば、常習賭博で有罪が確定した。後で、裁判中に隠れてやった別の賭博が発覚した。できません。効力は、訴因に書いた事実だけでなく、公訴事実の同一性の及ぶ範囲、全体に及びます。ここで伏線が回収されます。なぜか。その範囲なら、検察官は訴因変更で追及できた。だから被告人は、その範囲で処罰の危険にさらされていた。危険をくぐった以上、後出しの再起訴は二重の危険。一部が確定すれば、残り全部に効力が及びます。

## 単一性の判断基準——訴因か実体か 〔論文の骨格〕

ひねった応用。実は常習なのに、単純窃盗で起訴された場合。前の裁判も今回も、検察官は常習と書いていない。これは一個の事件か、別々の事件か。判例は、訴因を基準とします。各訴因のみで、単一性を判断する。当事者主義です。審判の対象は、検察官が出した訴因。裁判所が勝手に、本当は常習だ、とは認定できない。結論、新しい窃盗は起訴できる。前の判決の効力は及ばない。

## 主観的範囲・時間的範囲〔短答・論文共通〕

範囲の続き。誰に、いつまで効くか。まず主観的範囲。効力は、被告人本人だけ。相棒Aが無罪でも、Bは免れない。相対効です。原則、第一審判決の宣告時が基準です。それより前の事実は、前の裁判に含まれる。例外は、控訴審が破棄自判したとき。そのときは、控訴審の判決時まで延びます。そこまでは、検察官が訴因変更で追加できたから。後出しジャンケンには、認めない。

## 論文の型：一事不再理効の客観的範囲〔論文〕

論文のコア規範。逐語で覚えるのは太字だけ。一事不再理効は、訴因記載の事実だけでなく。公訴事実の同一性の及ぶ範囲の事実全体に及ぶ。あとは復元キーで戻せます。根拠は憲39 二重の危険。危険の範囲＝訴因変更で追えた範囲。それが公訴事実の同一性の範囲。常習一罪は全体に及ぶ。

答えは、前訴と後訴が公訴事実の同一性の範囲内かを判定します。

## まとめ——手続の出口を踏破〔まとめ〕

まとめます。判決の確定で、3つの力が生まれる。形式的確定力・実質的確定力・執行力。根拠は憲法39条の二重の危険。効力は実体裁判に生じ、形式裁判には生じない。免訴は例外。誰に＝被告人のみ、いつまで＝第一審判決時。第5章の入口、裁判の確定と一事不再理でした。

## 次回予告——上訴〔次回予告〕

確定する前に、上の裁判所へ不服を申し立てる手続。上訴の利益や、不利益変更の禁止も扱います。お楽しみに。